

「屋内専用カーリング場」の完成を契機とした カーリングの普及・拡大・選手強化へ向けた 取り組み

～北海道名寄市におけるカーリング関係者へのイン タビュー調査から～

侘美 俊輔

● 要 約

2022年5月スウェーデンで開催された「世界ジュニアカーリング選手権大会 2022」において、女子日本代表は史上初の金メダルを獲得した。さらに2023年4月韓国で開催された「2023世界ミックスタブルスカーリング選手権大会」においても、日本代表ペアが史上初の銀メダルを獲得した。いずれの大会においても、人口3万人に満たない北海道名寄市出身の選手が日本代表として参加していた。

本稿は、北海道の農村である名寄市から、「なぜ世界的に活躍するカーラーが輩出されるようになったのか」という問いを検証しようという試みである。そこで本稿の目的は、北海道名寄市を事例に、カーリングの普及、拡大、選手強化の過程や、指導方法などの競技スポーツ的な要素について、インタビュー調査によって検証することである。そこから今後のカーリングの普及、発展に向けた糸口を掴むことが目的である。

● キーワード

カーリング

指導方法

スポーツによるまちづくり

地方都市

選手強化

はじめに

カーリングは、『氷上のチェス』と呼ばれるカーリングは、丸い石が回転（カール）する様子が髪の毛がカールする様に似ていたことから名付けられたといわれています。約 40 メートル先に描かれたハウスと呼ばれる円の中に、ストーン（石）を投げ入れて点数を競う」競技種目である（日本オリンピック委員会ホームページより）。我が国のカーリングは、2022 年に開催された北京オリンピックで「ロコ・ソラーレ」が銀メダルを獲得した。周知のとおり「そだねー」、「モグモグタイム」など、彼女らが楽しくカーリングをしている様子は、日本国内において広く話題となった。

ところで、カーリング界において「聖地」として有名になった北見市常呂町同様、ここ数年間コンスタントに世界大会へカーリング選手を輩出し続けている地域の 1 つとして、北海道名寄市（以下、名寄市とする）があげられる。

名寄市のホームページによると「北海道の北に位置する名寄市は、天塩川と名寄川が豊かな恵みをもたらし、もち米は日本一の作付面積、アスパラガスは北海道有数の作付面積・収穫量を誇る農業を基幹産業とする都市です」とある。2023 年 11 月 30 日現在、名寄市の人口は 2 万 5000 人程度であるが、「都市データパック 2023 年版（東洋経済新報社、2023）」に掲載された『住みよさランキング』において全国 231 位（北海道内 7 位）にランクされている。

名寄市出身のカーリング選手として、2022 年 5 月スウェーデンで開催された「世界ジュニアカーリング選手権大会 2022」において、女子日本代表は史上初の金メダルを獲得した（名寄出身者 1 名）。その翌年（=2023 年）の同大会においては女子日本代表選手の 5 名中 3 名が名寄市出身であり、銀メダルを獲得した。さらに 2023 年 4 月韓国で開催された「2023 世界ミックスダブルスカーリング選手権大会」においても、日本代表ペアが史上初の銀メダルを獲得した。その男子選手は名寄市の出身である。本稿において話題の中心となる現在の名寄市カーリング場は、「北海道広域緑地計画」に基づく道北圏の広域公園として整備された「サンピラー交流館」内に、2006 年 11 月に「屋内専用カーリング場」としてオープンしたものである。

上述の点を踏まえ、筆者の問題意識は以下の 2 つである。第 1 に、北海道名寄市では「なぜ世界的に活躍するカーラーが輩出されるようになったのか」という点、第 2 に、「ソフト・ハード面などを含めたどのような行政による施策、環境づくりがあるのか」についてである。本稿では、この第 1 の問いについて検討し、別稿において第 2 の問いについて考察する。

そこで本稿の目的は、名寄市を事例に、カーリングの普及、拡大、選手強化の過程や、指導方法などの競技スポーツ的な要素について、インタビュー調査によって検証することである。そこから今後のカーリングの普及、発展に向けた糸口を掴むことが目的である。

本稿において、名寄市におけるカーリング選手強化の過程を追い上げることは、筆者が暮らす北海道稚内市（以下、稚内市とする）においても示唆的な事例となることが予想される。稚内市は、2020 年 5 月に北海道内で 4 番目の「通年型カーリング場」が建設された。この通年型カーリング場の完成を契機に、日本カーリング協会（以下、JCA とする）の主要大会が誘致されたり、市内の小、中学校でカーリング授業が始まるなど市民のカーリング熱が高まりつつある。また 2023 年に稚内市で開催された「第 14 回日本ミックスダブルスカーリング選手権大会」において、地元の育英館大学チームがベスト 8 となった。さらに同年札幌市で開催された（成人の）「第 43 回北海道カーリング選手権大会兼アルバー

「屋内専用カーリング場」の完成を契機としたカーリングの普及・拡大・選手強化へ向けた取り組み ～北海道名寄市におけるカーリング関係者へのインタビュー調査から～

タ杯カーリング大会」に稚内市内の小、中学生3名が参加するなど、若手カーリング選手の競技力向上が徐々に進みつつある。そのため名寄市の一連の取り組みは、地理的条件、人口規模、カーリング競技環境なども類似している稚内市にとって示唆に富んだものとなることが予想される。

なお、本稿ではカーリングのテクニカル・タームが数多く登場する。カーラーたちが一般的に使用する言葉の意味を忠実に再現するため、特に注釈を加えていない。詳細はルールブック、インターネットの解説サイト、カーリング中継の解説者の言動などを参照していただきたい。

1. カーリングの学術的背景 ～本稿における視点～

本稿において学術的背景として注目するのは、①カーリングの「後発性」、②「ニュースポーツ」との類似性、③「地方におけるカーリング実践」、④「地方における創造性」の4つの点である。

第1に「カーリングの後発性」についてである。「カーリングのまち」として有名な北見市常呂町におけるカーリングの始まりは、1980年であった。カーリング普及のきっかけは、北海道池田町で開催されたカーリングの講習会に3名の町民が参加したことに始まる。旧常呂町で中心となって普及を進めたO氏は、カーリングを「冬場に何か良いスポーツ」という健康・レクリエーション的なスポーツ活動として位置づけていた。そこにあったのは、現在のオリンピック種目という競技スポーツのイメージとは質的に大きく異なるものであった。カーリングがオリンピックの正式種目となったのは、1998年の長野大会からである。そのため、他の競技スポーツと比較した際、普及・拡大、組織化、競技化、学術研究などの多くの点で「後発」の部類に属するものと推察される。現在、カーリングの研究は、戦術面を中心に物理学者、工学者による報告が盛んである。例えば上野ら(2014)、山本ら(2018)や、梶井ら(2018)による「ポータブル戦術支援DBシステム『iCE』」の研究成果は、カーリング中継や、強豪チームのデータ分析に利用されている。このように工学者らを中心とした戦術研究はなされ始めているものの、カーリングの普及・拡大、指導方法などを対象とした社会科学的な研究は、ほとんどなされていない。

第2に「ニュースポーツ」との類似性についてである。本稿では、前述の「カーリングの後発性」に着目する過程において、議論の端緒として参照するのが、国内で1970年代前後に盛んに開発された「ニュースポーツ」の文脈である。「ニュースポーツ」は、仲野(2006)によると「競技力・体力・老若男女を問わず、あらゆる人々に開かれ親しみやすさを含んだ新しい概念のスポーツ」と述べている。カーリングは、初心者でも「気軽に楽しむことができる」ことから地方における「交流」という文脈においての機能も果たし、「ニュースポーツ」と類似する点が多いものと推察される(佐美, 2021, 2023-A)。周知の事実であるが、北海道ではゲートボール、ミニバレー、パークゴルフなどの「ニュースポーツ」が考案されている。

第3に、「地方におけるカーリング実践」への着目である。大沼(2010)は、北見市常呂町のカーリングを「多様な町民が集まり、人びとのつながりの深さを見せてくれるのがカーリング場」であり、さらに「常呂町のカーリングを五輪にまで引き上げていった源泉は、こうした人びとのつながりを絶えず編んできたことなのでしょう。五輪選手の存在もこうした網の目の1つのように見えてきます。世界へとつながった常呂町のカーリングは、昔のままの社交空間をとどめています」という。本稿における視角も、このような地方の実践の中に埋め込まれたカーリングへの注目である。

第4に、「地方における住民の創造性」への注目である。この点においては、北海道のスポーツを事例としたものとして、前田(2006)が別海町のスケートを事例とした調査を行っている。前田は、地域スポーツ実践を見る視座として、W. ハナーズ(1999)の「周辺文化のためのシナリオ」を引用し、「グローバルな文化の受容による影響が、周縁においてこそ最も端的にあらわれる」とするならば、「日本の周縁にこそ視座を据えるべきであろう」と指摘する。さらに周縁において「日常的な実践を営む具体的な人々に焦点を当てることで、スポーツをめぐるグローバリゼーションの影響と人々の対応がより明確に見えてくるはずである」と指摘する。この論考では、別海町におけるスケート少年団を事例に、その保護者や、住民たちの実践や工夫に注目し、彼・彼女らの「創造性」を描き出した。そこには「均質化されるシナリオ」と異なる「創造性」が発揮された実践があることを指摘した。別海町のスポーツ実践という点では、別海高校が2024年3月に開催される「第96回選抜高等学校野球大会」へ「21世紀枠」として出場することも記憶に新しい。2024年1月26日配信の中日新聞によると、「高野連(=公益財団法人日本高等学校野球連盟)」による選考理由は「最低気温0度未満の冬日が年平均で半年以上あり、日照時間も短い、農業用のビニールハウスを活用するなど工夫して練習する。農業や漁業に従事する別海町民の支援を受け、手作りの練習設備を利用するなどの姿が、高校野球の理念にふさわしいとして評価を受けた」とされ、スケート同様に高校野球の練習環境づくりにおいても住民、高校生らによる「創造性」の一端が見られたものと推察される。また佐美(2018)は、北海道利尻島における健康づくり運動を事例に、グローバル化されている健康産業とは異なるレベルで、高齢者の合理性であり、保健師たちが実態に沿うように工夫した創造性の中から、都市部とは異なる地縁的な結びつきによる「現代に生きる高齢者の姿」を提示した。

上述のように本稿は、「カーリングの後発性」、「ニュースポーツとの類似性」や、「地方におけるカーリング実践」、「地方における住民の創造性」の4つのキーワードで構成される。

2. 名寄市における「カーリング関係者」へのインタビュー調査

本章では、名寄カーリング協会(以下、名寄協会とする)におけるカーリング協会員(以下、「協会員」とする)6名のインタビュー調査対象者の概略、ならびに調査方法を提示する。なお調査の実施に際して、名寄協会に日程等の調整を依頼した。

2-1. 「協会員」のプロフィール

本稿における調査対象者の一覧である(表1)。A~Fさんいずれの会員もJCAに協会登録をしており、かつ選手として地区予選を勝ち抜き、JCA主催大会(=全国大会)に選手またはコーチとして出場した経験を有する。すべての調査対象者が現役の競技者であるが、同時に「コーチ」、「審判、運営(=大会運営スタッフ)」なども兼務している。◎>○>△>無印の順に現在の比重を表している。なお、年齢、細かな役職、競技歴等は、個人が特定されることを防ぐ目的からあえて記載せず、大雑把な表記のみとしている。

表1 「協会員」のプロフィール

	性別	年齢層	高校の部活動	出身地	コーチ ※3	審判, 運営	調査方法
A	男	50, 60代	野球	名寄	◎		ZOOM
B	男	50, 60代	バドミントン	名寄		◎	対面
C	男	50, 60代	剣道	名寄	○	○	対面
D	男	50, 60代	文化部	道北※2		◎	対面
E	男	20, 30代	カーリング※1	名寄	△※4		対面
F	男	20, 30代	バドミントン	名寄	△※4		対面

※1 正式な部活動が無かったため、カーリングは市内ジュニアカーリングクラブで実施

※2 道北=宗谷, 上川, 留萌総合振興局管内の市町村出身

※3 ◎, ○JSPO (日本スポーツ協会) による公認コーチ1以上の資格保持

※4 △JSPO 公認コーチ資格は保持していないが、ジュニア等への指導経験あり

2-2. 協会員への調査方法

Aさんへのインタビュー調査は、2023年6月2日にZOOM上で実施した。Bさん、Cさんは2023年6月8日、D～Fさんは同年6月9日に名寄市の公共施設内にある会議室を使用して「対面」で実施した。調査内容は、「カーリングをはじめたきっかけ」、「カーリング界の課題」について尋ね、コーチ経験が豊富なAさん、Cさんには「カーリングの指導方法について」、「指導者としての意識」、などについて、協会事務局の経験を有するBさんには「名寄のカーリングにおける歴史の変遷」などの質問を行った。調査時間は1人当たり60分程度を行い、いずれの調査対象者に対しても半構造化インタビューを実施した。なお、発言者を特定しても差し支えない場合は、Aさん、Bさんなどと明記するが、特定されることが相応しくない場合は、発言者を記載していない。都合上、「Xさん」、「Yさん」、「Zさん」、「とある関係者」などと明記するが、実際にはA～Fさんのいずれかである。

得られた音声データの「テープおこし」を育英館大学の学生2名に依頼し、そのトランスクリプトをもとに、本章の目的に沿うキーワードを抽出し、客観的な分析を行った。なお、育英館大学の学生2名には、本依頼に際して、守秘義務、個人情報保護に関する講習を実施した。

本章で引用する「語り」において、()では、前後の文脈を踏まえて、筆者による加筆を行っている。また、【】は語りにおいて固有名詞が登場したため、個人の特定、個人情報保護の観点から加筆・修正を行っている。《》はインタビューアである筆者が会話中に質問をしている。

なお、インタビューアである筆者は、育英館大学カーリング部の顧問であり、日常的に大会引率等を行っている。そのため筆者と同じ「道北ブロック」に属する名寄協会の協会員とは面識があることから、日常語表現も散見される。しかしながら、「語り」のリアリティを再現するため、そのまま掲載している。

3. 名寄市においてカーリングトップ選手が輩出されるまで

カーリングは日本において幾度となく紹介され、そのまま普及することなく消失していた。周知のものとなりつつある現在のようカーリングの広がりを見せはじめたのは、1977年にカナダ・アルバータ州との文化交流事業で、北海道庁が中心となってカーリングが紹介されたことが大きいとされる。その一翼を担ったのが、カナダ人の元世界チャンピオンであるウォーリー・ウースリアック氏であり、北海道内21市町村において巡回カーリングスクールを実施したとされる。この21市町村には、名寄市、稚内市なども含まれている。その後、1988年に「北海道北見市の常呂町に日本初のカーリング専用施設が出来たことが、日本において競技としてのカーリングを定着させる礎」とされる（JCA ホームページより）。

3-1. 名寄市における「屋内専用カーリング場」誕生までの歴史

名寄協会より、一般財団法人名寄市体育協会（2017）による「財団設立20周年記念誌 飛躍（以下、「20周年記念誌」とする）」を借用した。以下ではその資料と調査対象者へのインタビュー調査をもとに、名寄市における「カーリングの歴史」を整理する。

名寄市のカーリング場は、1983年1月に南広場に造成され、2月8日にウィーリーさん（「日本カーリング協会」は、ウィーリーさんと呼称）による講演が行われた。Bさんによると「名寄って元々カーリング始まったきっかけっていうのは世界チャンピオンのウィーリーさん。これのために作った。ウィーリーさんが来る。（昭和）58年だ」という。

その後、1990年12月にスポーツセンター南側に新市営カーリング場（＝ビニールハウス製3棟）が誕生した。どちらも外気温、日光などの影響を大きく受けるものであったため、1～2か月程度しか使えず、この期間内であってもアイスコンディションによっては使用不能となることもあったという。調査対象者のうち、この時代を主に経験しているのは、A～Dさん、幼少期のFさんであるが、Bさん、Dさんが当時の様子を詳細に語ってくれた。

日中のビニールハウスだからさ、結局太陽の光浴びると、なるべくハウスには雪積んどいて、直接当たらないようにっていう工夫をするんだけど、それでもね、当たって溶けちゃったら、ちょっと使えないっていうのがあって、主に夜しかしないから、今もそうだけど、大抵は働いてるから夜でもいいんですけど、その当時働いてない人が昼間やろうと思っても、昼は太陽があるんでできないみたいな、溶けちゃってできないみたいな。夜、日中溶けちゃったやつがちょっと凍って、若干平らになったところに水、ペブル打って、やるっていう感じだったんだよね、毎日、仕事終わってから。

（ビニール）ハウスの中に氷作ると言ったら、もうもろ外の外気温が反映するし、まかり間違ったらもう氷すぐ割れるし、気温が下がったらバンって下から突きあがって、でも1回ついた癖は治らないし、変わったらこうだし、もう1本道で、どこにどう投げてもそこにしかいかない、そんなとこで「何をどうしろ？」と言われてもって感じですよ、でも気温が下がったら「倍の距離」投げる勢いで投げなかったら届かないとかさ、バックスイ

「屋内専用カーリング場」の完成を契機としたカーリングの普及・拡大・選手強化へ向けた取り組み ～北海道名寄市におけるカーリング関係者へのインタビュー調査から～

ングフルに上げてるっていう状況だったからね。それがもう、あそこ（常呂の通年リンクが）出て来て、初めて連れてってもらったときなんか、ここでバックスイングはないなと思った。

以上のように、外気温や、日光による影響を受け、12月～2月の限られた条件下でしか使えなかったものの、仕事終わりにリンクづくりを行い、アイスコンディションに合わせてながらプレーしていた様子が推察される。

またXさんは、先輩たちから聞いた話として、今の競技志向の強くなったカーリングとは大きく異なり、疑問符が付くようなことも行われていたという。

《今でこそ当たり前前にスポーツになってますけど。この最初の頃とか「これスポーツなのか？」とか言われたりとかしたのでしょうか？》。「酒飲みながら」やってたからね、絶対そう（＝これがスポーツなのか？）思われたと思う。それこそ俺も前に古い人たちから聞いたけど、ウォーリーさん来たときとかの話ではないと思うけど、酒飲んでやらないと寒くてできないみたいな話を聞いてて、俺入った頃は、酒なんて飲んでやったらもう転んだら危ないぞっていうふうになってるから、もうあんまりそんな飲んでやるってことにはなかってなかったけど、僕の先輩の、さらに先輩が言ってたのは～みたいな感じで聞いたことあるよね。だからその頃って本当にいわゆる完全にレクリエーション的な時代だった。ハウスもないんで、天然氷で、名寄なんて-30度代だと思うんだ、古ければ古いほど名寄寒いんで、-30度の中でお酒を飲みながら、ウイスキーちょっと飲みながらやるっていうのをたぶん見せられたと思うんだよね、ウォーリーさんにね。

以上のような語りは、北海道で1970年代以降に誕生した「ニュースポーツの文脈」と類似するところが多い。前掲のミニバレーを事例とした拙稿においても、初心者でも気軽に楽しむことができること、住民の社交場としてのレクリエーション的な要素が強いところなどは散見された（侘美, 2023-A）。この点を鑑みると、現在の競技スポーツ的なカーリングとは大きく様相が異なる。同時に、1970年前後に作られたニュースポーツ、レクリエーションスポーツの中で、現在のカーリングのように急速な競技化が進んだスポーツもほとんどないものと推察される。

その後、名寄市では2006年11月11日に北海道立サンピラーパーク内に11月～3月まで使用可能な「屋内専用カーリング場（専用施設^{*1}）」が誕生した。語りの中では、「室内」、「屋内」などという言い方も散見されるが、日本カーリング協会のホームページでは、「専用施設」という呼称を用いている。本稿では、これらの指摘を鑑み「屋内専用カーリング場」として以下の論考を進める。

余談であるが2024年2月現在、北海道内には北見市が2か所、札幌市、稚内市、帯広市の5か所に「通年型」の専用カーリング場があり、名寄市のように「冬季間のみ使用可能」な専用カーリング場が妹背牛町、南富良野町にある。北海道内で専用カーリング場と呼ばれているのは、以上の8つである。これ以外には、スケート競技等他競技との併用、規格を満たしていない、屋外のカーリング場が10か所存在する（JCAホームページ参照）。

拙稿侘美（2024）においては、「屋内専用カーリング場」が名寄市にどのようにして誕生したのか、

その経緯を聞き取り調査によって明らかにした。結論として、名寄市における「屋内専用カーリング場」は、北海道による「北海道広域緑地計画に基づく道北圏の広域公園として整備」されたものである。市職員、北海道議会議員、カーリング協会の3者の「陳情」によって「名寄市に室内カーリング場を」という思いが結実し、「北海道立サンピラーパーク」が誕生したことを示した。

以下では、名寄市に「屋内専用カーリング場」が完成したことで何が変わったのか、調査対象者4名の語りを引用する。

やっぱり室内（＝屋内専用カーリング場）ができて、2006年、やっぱりそこがやっぱり大きかったよね。やっぱり名寄としては2007年に、翌年に「ジュニアクラブ」立ち上げて、それが【カーリング関係者】とこの息子さんだったりとか、【世界的な選手】だったりとかね。あの辺りがみんな入ってくれて、クラブとしては1期生、最初のね。たくさんいたけどね。そこからジュニアクラブ作ったのがきっかけ、まずは。

圧倒的にあそこ（＝屋内専用カーリング場）ができたことによって、競技が2つに分かれた。愛好で楽しむ人と、室内で上を目指す人、元々目指してた人たちが、さらに目指したくなるっていう環境が整った感じかな。そうすると、職場対抗とかレクで40人ぐらい集まったっていう、そういう競技人口（＝愛好的な人）がやっぱりちょっと減った。（屋内専用カーリング場）に移った時はみんな新しいからやっぱりいたんですよ。人数的にも多かったし…、ただ上を目指しているチームは、あれ（＝屋内専用カーリング場）ができることによって、その実力差がもう一気に出てきちゃったので、名寄で、道北（予選）に行くために（名寄）予選をやるよって言っても、出るチームが、限られてきて。

きっかけは、名寄のサンピラーパークできた年から始めてるんですけど、たまたま【自分の親戚が勤めていた】ので、なんで連れられて、カーリングをやり始めたみたいな感じですね。屋外のカーリング場が名寄にあって、ずっと（カーリングを）やってたっていうのは、話を聞いてたんですけど、実際施設できて新しいとこできるから、ちょっとやってみる？みたいな話になって、とりあえず何も知らないけど、とりあえず行こうって連れてってもらったところがスタートですね。

あの頃（＝8歳ぐらいにカーリングを始めた）はあの施設（＝サンピラーパーク）じゃなくてハウスの施設でその始めたって言ってもそんな本格的にじゃなくて、やっぱり何て言うんすかね、本当（親や友達）ついて行って遊ぶというか、それぐらいで。でもサンピラーパークができたことでちゃんとしたカーリングができるのかなっていう期待がありました。

語りの中では、「屋内専用カーリング場」の完成を契機に、小学生～高校生が所属可能な「ジュニアクラブ」が誕生した。このような組織的なジュニアの育成が始まり、現在では第1期生だったEさん、Fさんも後進の指導に当たっている。一方、「屋内専用カーリング場」の完成を契機に「競技志向者」

「屋内専用カーリング場」の完成を契機としたカーリングの普及・拡大・選手強化へ向けた取り組み ～北海道名寄市におけるカーリング関係者へのインタビュー調査から～

と「愛好的な人」との二極化が始まり、大会等の参加者も固定化し始めたことが語られている。この語りから、誰でも気軽にできるレクリエーションスポーツ、ニュースポーツとして誕生したカーリングが、徐々に「競技スポーツ」へと遷移するターニングポイントであることが推察される。このような光景は、大沼（1998）によるミニバレー、パークゴルフの事例研究において「技術の高度化」と指摘されている部分と一致する。

一方の「ジュニアクラブ」に誕生後に本格的にカーリングを始めた世代である E さん、F さんは屋内専用カーリング場の誕生がきっかけとなりカーリング、競技カーリングを始めたことが読み取れる。新規にカーリングをはじめた児童・生徒は、「(ジュニアクラブに) たくさんいたけど」と述べていることから、地元の小・中学生や、保護者には屋内専用カーリング場の誕生は一定程度のインパクトがあったものと推察される。

3-2. ジュニアクラブ、チーム指導の中身、方向性

前章の「表 1」で示したように、A さん、C さんは、コーチとして長年にわたり選手を指導してきた経験を有する。また、彼らの功績を客観的な視点から X さんが語ってくれた。

(名寄から世界で活躍する選手が増えたのは) リンク (=屋内専用カーリング場) が大きいし、教えてた【A さん、C さんなどの地元のコーチ陣】が大きいんじゃない。「コーチがついて教えるっていう仕組み」がなかったから、みんな自分たちでやってた。成人は特に、ジュニア (クラブ) ができたときに、自分たちでできないから、誰かが教えなきゃみたいなのと、コーチがいなきゃいけないし、子どもが大会に出るときにはコーチが付かなきゃいけないってこともあったので、誰かは就かなきゃならないっていったときに、一番は【地元のコーチ陣】の存在がでかい。

上記のように、「屋内専用カーリング場」の完成を契機に作られたジュニアクラブの指導は、A さんや C さんなどのように子どもたちの指導を引き受けられるコーチ陣が名寄にいた。その指導方法は、C さんによると「たまたま僕もカーリングで指導普及員としてたんですけど、もちろんマニュアル的なものは、あって、今はそれが (JSPO) コーチ 1、コーチ 2 になってますけど」とのことである。しかしながら、「指導マニュアル」といっても、後発のカーリングでは、1 章で指摘したように「指導方法」が他のスポーツのように発達しているとは言い難い部分があると考えられる。

そこで、後述するように A、C さんのように暗中模索しながら、気づき、学びながらコーチをしていた姿を読み取ることができる。

3-2-1. 指導者としてのこだわり (チームづくり、チームの心構え)

チームを指導するにあたり、子どもたちに「どのようなことを指導しているのか」尋ねたところ、A さん、C さんの双方とも細かなカーリングの技術的なことではなく、チームづくり、心構えについて回答が得られた。なお、回答者を特定されないために、どちらの発言かは明記しない。

今とそんな変わらないと思うんだけど、「目標設定」とかも当時やってたし。俺も結構メンタルトレーニングずっとなら習ってたっていうか、あの学んでたわけじゃないけど。講習年1回か、2回ぐらいずっと行って。そういうのをこう小学生に落とし込みして、やってたりとか。目標設定とか夢とか。

まずは、チームとして「応援されるチームになってね」っていうのはずっと言ってたよね。人から応援もされないと、「あのチームね」って言われるのはだめだし、みんなから頑張ってるねとか、応援されるチームになれば、本人たちもいいしね。それはやっぱり、カーリングの技術よりはやっぱり、人対人なんで、自分が上手いからどうのこうのではなくてね。そういうのを口酸っぱくして……。だから、何が大事って何でもスポーツもそうだと思うんだけど、やっぱり準備が大事だと思って、それを教えていったけど、それは、ずいぶん言った記憶はありますよね。

筆者の質問の仕方が抽象的であった点は否めないが、二人ともカーリング以前の姿勢や、準備に関する回答が得られた。

3-2-2. 教え方、コーチとしての声掛け、気づき

チームを指導するにあたり、子どもたちへの指導から、彼ら自身の声掛け、コーチとしての気づきについて質問し、以下の回答が得られた。

(Xさんは野球の指導をしていた時の昼休みに子どもたちが自主的に紅白戦をやって)俺、(俯瞰的に)見てめっちゃいい動きするじゃんと思ったのね。声も出すし、打つしめっちゃ走るしみたいな。もしかしたらこれ、「指導者いない方が究極だよ、いいんじゃないの？」とかって思って、じゃあ教えるんじゃないで、やっぱり彼らがこういうふう「自ら野球を楽しみ」じゃないけど、やってくみたいなこういうスタイルをやっぱり目指さないと、本当の意味でうまくなならないっていうか。楽しくやれないんだろうなっていう「気づき」があって、それで、ちゃんと「コーチングみたいな、やっぱり勉強しなきゃいけない」っていうのは、それはなんかデカかったね。

(Yさんは)例えば、「本当はそこ、ドローなんだけど」ってコーチが思っても、テイクにいったとしても、絶対ドロー100じゃないじゃないですか。もしかしたらテイクで良かったのかもしれないし。作戦って最後の一投ドローかもしれないけど…。だから作戦っていっぱいあるっていうか、自分が思ったものが、きっと一番良い作戦なんだろうなと思うんだけど、ことショットに関しては、やっぱり選手が最初にインスピレーションの中で思ったのがきっといい作戦なんだろうなと思うんですけど。それを後からコーチとして、「あれはあそこ、あれじゃなくて、どうだったんじゃないとか、テイクじゃなくて」とかっていうと、選手が一番わかっている…とか思ってね。だから、全国まで行けるようになった

「屋内専用カーリング場」の完成を契機としたカーリングの普及・拡大・選手強化へ向けた取り組み ～北海道名寄市におけるカーリング関係者へのインタビュー調査から～

チームにそういう言い方をすると、きっと面白くないだろうなと思って、そこで負けてるのは、自分たち一番よくわかってるので、「いやあれは違ったわ」とかって言っちゃおうと「自分で考えないかな」という気はしますよね。

以上の語りから、それぞれのコーチ像が示唆される語りが見られる。Xさんの自由時間に子どもたちが自主的、主体的に野球をしている様子を見て、「指導者いない方が究極だよ」という気付きを自戒の念として学びにつなげたところが大きく、そこから本や、講習会などに参加し、さらなる学習へとつながっていった。この反省的に学ぶ態度がコーチとしての成長につながったものと推察される。

Yさんの声掛けは、旧来のように「上から」、決めつけた指導を行うのではなく、選手の主体性を促すコーチングを意識的に行っていた。カーリングの答えは、Yさんがいうように1つではない。そのため常に子どもたちが投げたいショットを後押しすること、また後から批判的なことを言わないことなど、選手の視点に立ったコーチングを意識的に実践していた様子が推察された。

3-2-3. 名寄のコーチ陣の教え子たち

Aさんや、Cさんなどの指導者から実際に指導を受けていた子どもたち、現在は20代～30代となっているEさん、Fさんらは、ジュニア時代どのような指導を受け、何が印象に残っているのか質問し、以下の回答が得られた。

(Xさんは高校) 当時はいくらも普段びっちり氷で乗って練習とか、スケジューリングして練習とかしてたり高校時代のときとかは、特にしてなかったの、大会期間の前1週間、2週間前ぐらいの練習とかは、アイスに入ってもらって、ライン見てもらったりぐらいの感じで。なんだろうなこれを、これを指導してもらったみたいなのすごい強い印象はいくらもないっすね。「自分で考えてやってくれ」みたいなそういう感じの意味かな。

(Yさんは) どうですかね技術的というよりは、基本的な作戦面だったり、あとは楽しくやるぐらいの、「ぐらい」のって言ったらあれですけど、そういった感じの指導というか、チーム作りみたいな形ですかね。いくらも細かいことを言う感じではなく、何となく雰囲気を作る感じですね。

前項で見たように、カーリングに向き合う姿勢、技術的なことよりも、Xさんが言うように「自分で考えてやってくれ」という考えさせられる練習を行っていたことが推察される。その結果、コーチに常に頼りっきりというチーム作りではなかったこと、またYさんがいうように「楽しみながら」カーリングを行っていたことが推察される。

3-3. コーチ、審判としてのカーリングの学び方

前掲したようにカーリングの指導方法は、体系化されたもの、アカデミックな議論がなされているわけではない。唯一体系化されたものとしては、公益財団法人日本スポーツ協会とJCAによる「公

認カーリングコーチ養成講習会」で配布される「カーリング指導者マニュアル」がある。また、JCA (2014) によるオフィシャルハンドブック『新みんなのカーリング』が刊行されているものの、現在の戦術、用具等にマッチしているとは言い難い。これらを除くと市販されているカーリングの指導書などはほとんど見られない。そこでコーチ、審判としてどのようにカーリング技術を習得しているのか質問し、Aさん、Dさん、Eさんからそれぞれ以下の回答が得られた。

やっぱりトップ選手とかに、よく聞くよね。聞く、聞く、全然聞くよ俺。独自のもの(教え方や理論)はないよそんな。自分で試してみても、いいなと思ったりとか、自分で噛み砕いたりするけど。なんかこれやれ、小さいうちはこうやってやんなさいは言うけど、【ジュニアカテゴリーで国内トップクラス】ぐらいとかになると、選択肢与えるけど、合う、合わないは絶対あるので、そこはやっぱり聞く、めっちゃ聞く、結局(トップ選手は)カナダの情報とか彼ら持ってるから、何がいいのかっていうのは常に聞く。

(カーリングを)学んだっていうほど学んだつもりもないんだけど、道協会の役員やってて競技委員会に入ってたから、大会にずっと審判兼ねて、参加してたんで、要は見る側、見る側はやっぱり見る側で自分が空きのときにやっぱり見えますよね。するとやっぱり常呂のお偉方が、「いや、そこはだろう、やっぱこっちからじゃない」とか何とかって。だから、ただただ、単に画面を見ながら解説を聞いてっていう感じかな、本当、「(ストーンを中に)入れると、こういう場面だったら、当然選択肢はいっぱいあるの中の何を選択すれば一番いいのさ」っていうところの部分で、「こっち、こっち、こっち」っていうのが、「いや、いや、そうじゃなくてこうだろう」とかっていう「外野の声」、あそこ(=常呂の人々)やっぱね、いっぱい知識持ってる人がたくさんいるから、だからただボーっと見てるだけでもすごいいっぱい入ってくるのさ。実際に戦ってる場面を見ながら、「なるほどね」っていうような感じで、だから、やっぱり北海道選手権とかって、一応上がってきてるシーンの皆さんで、そのレベルが低いわけじゃないから、それなりのところのレベルでやっつてる中で「ああじゃない、こうじゃない」、それでかな

当時は、それこそ強化合宿とか、強化チーム入ってたので、それで多分協会の人とか情報持ってきてくれたりとか、札幌にいたときは、近くにそういう人たちがいっぱいいるので、「どうだったよ、当たったよ」とか、「これがいいんだ、あれがいいんだ」と思うんですね。それこそ大会とかでもトップの人たちと一緒に大会出てやっつてくんで、そこで情報交換してたイメージです。やっぱりカーリングの情報交換ってそういう選手同士が情報交換できるし、何か本があるとかそういうのは出てないで、情報交換であれ、「あのときどうでした?」とか「ずっとやっつてるんですか?」とか質問して、やり取りしていきっていくところですよ。

いずれの3名とも「人の話を聞く」という回答であった。トップ選手、各協会主催の強化合宿、常

「屋内専用カーリング場」の完成を契機としたカーリングの普及・拡大・選手強化へ向けた取り組み ～北海道名寄市におけるカーリング関係者へのインタビュー調査から～

呂の審判など時代の最先端を走っている技術を「人づて」に習得しているようである。

3-4. 名寄のユニークな仕組み

本節では、筆者の属する稚内協会ではあまり見られない名寄協会のユニークな取り組みについて、4つほど紹介する。

ジュニアクラブとチームの練習をわける&年1回のコーチ契約

1年に1回ちゃんとね、コーチ契約するんですよ。俺コーチも自分で選びなさいって言うてるから。そしてコーチと話して、一緒にやれそうだと思うたらやってみたいな。俺は、なんていうんだ、その優勝したいとかじゃなくて、高いモチベーションでやりすぎどうせやるならとことんやりたいでも学校の勉強もおろそかにするのも嫌だし、部活もやめて欲しくないし、全部100%一生懸命頑張るみたいなスタンスだったら俺は付き合うよっていう話、そうじゃなかったら俺もね、彼女たちに、時間を預ける何もないし。クラブとしての活動はやるよ、チームを作るときは、そういうふうにとどのチームも、コーチを自分たちでちゃんとお願いしなさいって。

(名寄のジュニアクラブでは、)クラブの練習は、全体一人一人の練習みたいなイメージなのね。「チーム単位」っていうより、チーム作ったときは、「クラブの練習+チーム練習」をっていうこと。別練習しないとうまくなれないし、だから(ジュニア)クラブの中で、チーム練習はしないから、チーム練習みたいになってるときもあるけど、基本はクラブの練習して、チーム作ったときは、「もし全道だけ優勝したい」っていえば週3回、2時間ぐらいの練習で、「全道で優勝できるか？」ってのは、そういう問いかけみたいなのはするんですよ。「やっぱり別な練習必要だよな」、「クラブ以外の練習でもやっぱり終わったあともう1時間やるとか」、「クラブじゃない日に集まってやるとか」、そういうやり方なんすよ。

市役所の全面的な協力

市役所ぐらいしか今はどうしても、多分民間に入っちゃうと、そんなにカーリングで、上の大会行けるかって休めないし、そんなに職場の理解もあるわけじゃない。カーリングで採用しろは別だけど、やっぱそういう企業がないのはちょっと大変だよな。

うちの市役所は、「カーリングクラブ」があるんですけど、そのカーリングクラブを教育委員会のお手伝いってことで、勤務として行かせてんだよね。そうでもなければ、民間の人にちょっと行ってっていうのはなかなかね、仕事休んでってなっちゃうんで。市役所のカーリングクラブってのがあるから、職場的にはみんな理解していただける感じだし、名寄っているんなスポーツ団体や、事務局っていう役所の人が多い。ほぼ役所の人ややって、やっぱ地域に役所が「何も手伝わないってことにはならん」っていうふうに理事者(=市長)側も思ってた、スキーマの大会でもバスケの大会でも、野球の大会にしようが、「名寄市で何かやる」ついたら、「お前ら手伝いに行け」っていう方なのさ。うちの理事者が。なので、休みも貰うし、派遣もしてもらえらるしっていう環境にはあるんだよね。そこは非

常に、それは名寄市として取り組んでるから、やりやすい。市役所は働く権利と休む権利を組合が謳うので、休みがあるうちは全然文句言われる筋合いはないです。

ジュニアクラブのための資金集め

財源ないと（旅費や餞別が）出せないから、うち「ビールパーティー」やってんすよ。基金造成、ジュニア育成ビールパーティーって言って、政治家の「パーティー券」みたいな。（具体的な金額の話なので省略）それを全額当ててんだよね、子どもたちに。それはカーリングの普及もあるし、ジュニアのお金もかかるからっていうのもあるし、リンク代にもなるし、当然やってる大人たちも、飲むの大好きだから、金払って、飲みに来て、子どもたちに金出してるなみたいな感じになってて、いっぱい飲んでいくっていうのもなんかちょっと定着してて…っていうのをやってたんだけど、ちょっとコロナで、ずっとやってないんですよ、3年くらい。なので今ジュニアクラブに出すお金は、今までのお金で貯めてきた分を使ってて、今回みたいに日本選手権に出ます、北海道選手権に出ます、世界選手権に出ますっていったら、大会参加費は、結構高額なので、事務局でっていうか協会で負担してあげてるんだよね、子どもたちの分。あと宿泊代とかそんなのはね、自分たちでやってもらうしかないんだけど、それプラス1人餞別あげたりとかして、ちょっと強いチームが出ると、（お金が）出てく回数が多いんで、【世界大会参加チームが名寄からだと】すごいどんどんと溜まったお金を使ってるんですよ。

道具レンタルの仕組み

いろんな寄付たくさんもらって。レンタルの靴貸し出してるし、小さい子23,24センチぐらいまでは、年間3000円で貸してるから。ブラシも無料で、パッドだけ自分でアイスパッド、重たい昔のブラシじゃなくて、アイスパッドをこう買ってもらって、布のとこだけ自分で毎年変えてねって。無料で貸し出しているから、そういう意味では本当に用具代はかからない。カーリング場に置いてあるやつってさ、重たいじゃん、小さい子こそ「アイスパッド*2持たせてやりたい」って思ってたのね。寄付くれたから、それで30本ぐらい買ってもらって、それを貸し出したりとかしてるんで。靴も買ってもらって、ある程度のサイズの何足か揃えて、それは去年からなんだけど、1足3000円で1年間。変な靴より全然滑るから、全然レンタルシューズの滑らないやつよりは、やっぱりね。サイズが子どもは変わるから、毎年なんて買えないじゃん、中学生とか本格的にやったらちゃんと揃えればいいみたいな。

いずれの取り組みも稚内協会では、ほとんど見られない取り組みであった。コーチとの契約に関しては、選手、コーチ相互に責任感が生まれ、1年に1度契約を見直す機会がある点もユニークである。第2の点は、マンパワーが少ない、地方都市ならでは工夫である。また制度があっても機能していない、休みにくい職場もある中、名寄市のように背中を押してくれる環境がある点はスポーツ振興に有益である。第3、4の点は、金銭の絡む話ではあるが、子どもたち向けの資金集め、備品をレンタル

「屋内専用カーリング場」の完成を契機としたカーリングの普及・拡大・選手強化へ向けた取り組み ～北海道名寄市におけるカーリング関係者へのインタビュー調査から～

するなど子どもたちがプレーに専念しやすい環境を作り出す取り組みであった。上記の4つは、名寄地域の特性に合わせた指導者、協会の創造的な取り組みと言える。

3-5. 学校体育との連携と期待

ここでは小学校、中学校などの学校授業との連携について質問した。稚内市においても、前掲したように2020年5月の「通年型カーリング場」が完成し、市内のほとんどの小、中学校でカーリング授業がスタートした。

学校授業はね、「選手獲得」にあまり繋がらんね、繋がらない、最初は繋がるのかなと思って、はりきってたけど。【世界大会出場選手の1人】は、そこだったけど、体験会の方がやっぱり来るね。シーズン始まったら、4回ぐらい無料参加できるようにしてんだよね。11月いっぱいぐらいはそっちはやっぱり人来るな。そのまま入るパターンが多い。やりたいう子来るから。やっぱりやっても、いいよね。授業はね、やっぱりどうしてもね、授業だから…。そんな勢い出ない。やっぱりカーリング場できたら、町としては「カーリング授業もやって、選手増やします」みたいな、役場的には言わなきゃいけないからやるけど、実際はそっち（学校授業は選手獲得に）はあまり繋がらない。

《名寄の学校体育では授業でカーリングやってますよね?》そこはね、（屋内専用カーリング場が）新しくできたときに、俺らも協会として人を増やしたかったから、成人よりは子どもだろうっていうところで子どもにターゲットを当てて、それを教育委員会にお願いをして、当時教育委員会もいろんなスポーツをやらせたいっていうのもあったし、体育の授業を他で教えてくれるならそちちょっと頼りたいみたいな、ちょっとそんなニュアンスもあって、冬にカーリングを取り入れてもらうっていうのが出たんだよね。利用の促進もあったのか。名寄市は特にそうなんだと思うんだけど、それのおかげで子どもたちが、いい選手が（ジュニアクラブに）入ってきたかつつたら、またそれはそれでもない。そうでもないんだよ。授業でやっても年に1回か2回しかやらないんで。毎週のようにやってくれれば、もうちょっと違うのかもしれないけど、そういうふうにはならないだろうから。

（学校体育に）ずっと期待してたんですよ。その指導普及委員っていう北海道（カーリング協会）の役職のやってる時、学校授業やるときに、僕、指導普及委員だったので、学校授業ほとんどやってましたけど。最初（カーリング授業が）スタートしたときに、僕も言ったか、協会では言ってたと思うんだけど、スタートしたときなんで、名寄カーリング協会の人について、最初教えますねって言って1年、2年やったら先生が、学校授業なので、先生が（氷に）乗れるようになって（授業を）やってくださいねって言ったけど、先生もやっぱり転勤もあるしね、若い先生だったらいいけど、50代とかの先生が来ても、もうおっかながっちゃって（=怖がってしまって）。常呂から転勤してきた人が「カーリングやりました」っていう先生が来ると一緒にやって教えられるんだけど、先生方も、忙しいから難しいですよ。

以上のように、3名とも学校体育授業におけるカーリングの実施が、直接的に選手獲得、競技力の向上にあまりつながらなかったことを述べている。稚内市でも各学校でカーリング授業が取り入れられ、名寄協会と同様に「体育授業の実施が選手獲得や底辺の拡大につながるのでは？」と好意的な期待感を持つものも少なくない。稚内市と名寄市は地理的条件、リンクの開設時期など同一条件ではないものの、彼らの指摘には耳を傾ける必要があるだろう。

3-6. 名寄から世界へ飛び出した選手たち

「20周年記念誌」を参照したところ、名寄協会は、1983年に協会が設立された。1988年にJCA主催の日本選手権で準優勝を果たしたチームがあるものの、それ以降、20年近く全国規模の大会で活躍する選手が見られなかった。

2007年、第1回の北海道ミックスダブル大会で優勝したペアが登場し、それ以降は、北海道選手権、北海道ジュニア優勝など活躍や、名寄出身者によるユニバーシアードへの参加、ユース五輪での金メダル獲得など名寄出身者の活躍が増加する。「20周年記念誌」では、2017年当時の「現状」の分析として、「…活動が少しずつ実を結び、日本や世界のカーリングシーンで活躍する選手も輩出してきているところです。また、毎年、多くのチームが年代別の北海道選手権や日本選手権にも出場し活躍をしています」とある。世界大会に参加した経験をもつXさんは以下のように語る。

大学入ってからかな、やっぱり。札幌行ってから、それこそ自分たちのレベルっていうかステージっていうか、(年代別日本)代表なったりとかそういうところで、今までの競技レベルがちょっと上がってきたところもあったり、周りの環境もやっぱりそういう代表レベルの人たちが、普段から試合、練習試合とかしてくれるような環境だったんで、何となく周りにすごい人たちがいると、その人たちどんな試合してんだとか、気になっててってなったときに札幌で例えばツアーとかあって、外国の選手とか来るとかって言うのを見ていく中で、だんだんYouTubeで、世界選手権で見たりとかっていう風にはなってきましたね。《札幌にいった影響ですか?》そこはやっぱり大きい。やっぱそういう環境面が大きい。

上記のように、名寄出身者が札幌のような多くのトップ選手が集まる環境に行き、そこでさらに活躍することができた。競争、切磋琢磨、ライバルなどスポーツ界ではよく聞く話ではあるが、カーリングのように「独学」をしにくい競技種目の場合は、「環境」による影響が大きいものと推察される。その背景には、Yさんのように「教え込む」のではなく、選手が主体的に「考えること」、「学ぶこと」をやめさせない指導があったからではないだろうか。このような選手の自主性、主体性、考える力を伸ばす指導を行っていることが、名寄カーリング界の強さの源と考えられる。

また、20周年記念誌の「将来展望」には以下のように記載されている。

待望の屋内競技場施設「道立サンピラーパーク」オープン以降、目覚ましく協力が向上しており、特にジュニア世代の活躍が顕著なってきている。国際大会にも十分対応で

「屋内専用カーリング場」の完成を契機としたカーリングの普及・拡大・選手強化へ向けた取り組み ～北海道名寄市におけるカーリング関係者へのインタビュー調査から～

きる施設は、カーリング関係者のみならず名寄市にとっても大きな財産であり世代交流の場となっている。

以上のように、地域の「大きな財産」として残りつつあるカーリングは、「20周年記念誌」が刊行された2017年以降も、ジュニア世代を中心に名寄から活躍する子どもたちが続いている。特に冒頭で提示した世界ジュニア、ミックスダブルス世界選手権などメダリストが登場し、名寄カーリング界の快進撃は続いている。

おわりに

本稿の目的は、北海道名寄市を事例に、カーリングの普及、拡大、選手強化の過程や、指導方法などのスポーツ的な要素について、インタビュー調査によって検証することであった。そこから、今後のカーリング普及、発展、選手強化に向けた糸口を掴むことが目的であった。また、筆者の問題意識は、北海道名寄市から「なぜ世界的に活躍するカーラーが輩出されるようになったのか」という点であった。

以上の目的、問題意識をもって名寄市のカーリング関係者に調査をした結果、以下の4点が明らかになった。第1に、「屋内専用カーリング場の完成」である。第3章の1節や、別稿でも検討したように、「屋内専用カーリング場」の完成は、名寄カーリング界にとって悲願であり、「名寄らしさ」を打ち出した施設の1つとして建設された。かねてより「ハコモノ行政」として、大規模な投資には懐疑的な市民感情が湧きやすく、特にカーリングのように競技人口の少ない競技では、なお一層の「逆風」が吹くことも予想される。現に拙稿(佐美, 2020, 2021, 2023-B, 2023-C)で検討したように、稚内市で「通年型カーリング場」を建設する際には、市長選挙の争点となるほど大きな市民的な関心事となった。名寄市では、道立公園として多機能な施設を配置したこと、ジュニアクラブの新設や、新たな競技者の獲得などへとつなげ、たくさんの国内トップクラスのカーリング選手を輩出し続けている。また、1998年の長野オリンピック以降、五輪の正式種目となったことも「追い風」となったものと推察される。

第2に、「ジュニアクラブの誕生」である。上述のように、屋内専用カーリング場の完成を契機に、ジュニアクラブが設立された。そして関係者の努力により、第1期生の中からユニバーシアード日本代表、世界ミックスダブルス日本代表の選手が誕生している。「屋内専用カーリング場」の完成によって、カーリングを習い始めた初期段階から競技カーリングに触れられる環境が整ったことで、最短距離での選手育成が実施されたものと考えられる。また、名寄市には競技カーリングに触れていた指導者がおり、彼らの指導方針が子どもたちに合致していたことも大きかったと推察される。

第3に、名寄市では子どもたちの活躍を支える「ユニークな仕組み」も見られた。第3章4節や別稿でも見たように、少子高齢化、過疎化が進む日本の地域社会において、親の目線に立った仕組みづくりや、同時に企業版ふるさと納税、パーティー券を利用した資金集めなど、「スポーツ指導」と「稼ぐ」ことを両立しながらジュニアクラブを運営している点は、稚内市におけるジュニア・スポーツの指導体制を考える上でも参考になるものと考えられる。ジュニア・スポーツを指導者のボランティア、手弁当で実施する時代は、令和の日本社会で合致しているとはいえない。

第4に、「日本、世界を知る者たちの経験とUターン」である。名寄市では前述のように年代別日本代表を経験したものが、現在ジュニアクラブのコーチをしている。国内トップクラス、世界を経験した「経験値」を地元に戻元できる点は、今後の名寄カーリング界にとって大きなものになると推察される。先に引用した前田による別海町の事例でも、世界を経験したスケート選手が地元に戻った事例が紹介された。前田の論考から10年以上がたった現在、別海町から2名のオリンピック選手が誕生している。このような「世界」を経験した経験値の還元や、次々と世界大会へ選手を輩出しつづけていくことは、今後上位の大会を目指していこうとする「あこがれ」、すなわちレイブとウエンガー(1993)が提唱する「実践コミュニティ」の形成へとつながっていくものと推察される。

末筆に本稿の限界と、今後の展望について述べたい。最初に本稿の限界についてである。本稿は、北海道名寄地区の実践にコミットし、6名のカーリング協会関係者へのインタビュー調査をもとにまとめたものである。インタビュー調査を依頼した6名は、長年のカーリング経験を有し、各セクションを代表する人材を選定したものの、考え方、方針等の偏りが見られるかもしれない。そのため調査対象者の選定によるバイアスは否定できない。また、カーリングは、研究の蓄積がまだまだ不十分な領域であるため、十分な論証がなされているとは言えない部分が多数散見される。今後は、他の近接領域の先行研究、そこから得られる示唆を取り入れていく必要性もあるだろう。

今後の展望は2つある。第1に、「カーリングの指導方法の探求」である。現在のカーリング界は、どこのチームも同じ、似たような練習、コミュニケーションの方法であり、良くも悪くも「マニュアル」的な指導方法が大半である。こうした点はカーリングの「後発性」に起因する部分が大さいと考えられる。今後は、カーリングの特徴に合わせた指導方法、初心者が楽しめるリードアップゲームの考案や、他のスポーツの戦術、作戦、研究成果の引用など、より学際的な議論が必要になると考えられる。また、教師、部活顧問向けの「指導書」も充実しているとは言えないため、今後の研究の蓄積が望まれる。さらに幼児、低学年の児童などルール、競技を重視するよりも、「遊びながらカーリングを行う」ことなど取り入れた授業方法についても検討が必要と考えられる。

第2に、「他地域における調査」の実施である。特に北海道南富良野町は目黒、寺田、山口など3名のオリンピック選手を輩出している。また、札幌市では長きにわたり継続的な選手強化が進み、国内トップクラスの選手を多数輩出している。2024年2月の日本カーリング選手権大会においても、札幌を拠点とする女子チームが準優勝するなど、その活躍は記憶に新しいところである。このように地域の中に埋め込まれたカーリングの実践にこれからも着目することは、今後の日本のカーリング界の発展に寄与するものと推察される。

●註

※1 「専用施設」は日本カーリング協会における呼称である。日本には「専用施設」が13か所あり、そのうち「通年使用可能」なものは9か所ある。北海道内には8か所の専用施設があり、そのうち5か所が「通年使用可能」である。名寄市にある北海道立サンピラーパークは専用施設であり、稚内市にある稚内市みどりスポーツパークは「通年使用可能」なリンクである。

<http://www.curling.or.jp/about-curling/arena-info.html> (閲覧日: 2024年2月11日)

※2 「アイスパッド」とは、主にハードライン社や、グラフィイトデザイン社から販売されているカーリングの「ブ

「屋内専用カーリング場」の完成を契機としたカーリングの普及・拡大・選手強化へ向けた取り組み ～北海道名寄市におけるカーリング関係者へのインタビュー調査から～

ラシヘッド」の名称である。日本代表レベルのトップカーラーたちも多数使用している。一般的にカーリング場で貸し出しされているブラシよりも軽量である。

●参考文献

- 中日新聞, 『『21世紀枠』選考経過…評価が高かった別海(北海道)がまず選ばれ, 比較検討された結果, 田辺(和歌山)に白羽の矢【センバツ高校野球】』(閲覧日: 2024年2月11日)
<https://www.chunichi.co.jp/article/843809>
- 北海道カーリング協会 <http://www.curling.hokkaido.jp/> (閲覧日: 2024年2月2日)
- 一般財団法人名寄市体育協会, 2017, 『財団設立20周年記念誌 飛躍』, pp.123-126.
- J. レイブ, E. ウェンガー, 1993, 『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加』, 産業図書, 東京.
- 公益社団法人日本カーリング協会, <http://www.curling.or.jp/> (閲覧日: 2024年2月2日)
ー2014, 『公益社団法人日本カーリング協オフィシャルハンドブック 新みんなのカーリング』
学研教育出版, 東京.
- 公益財団法人日本オリンピック委員会, 「カーリング」(閲覧日: 2024年2月11日)
<https://www.joc.or.jp/sports/curling.html>
- 前田和司, 2006, 「スポーツのグローバリゼーションと周縁における創造性」, 松村和則=編『メガス
ポーツイベントの社会学ー白いスタジアムのある風景ー』, 南窓社, 東京: pp.180-208.
- 榊井文人, 柳等, 伊藤毅志, 2018, 「工学的アプローチによるカーリング戦術支援(特集 冬季オリン
ピック・パラリンピックを支える科学技術)」, 『化学工学』82(2), 84-87.
- 本橋麻里, 2019, 『0から1を作る～地元で見つけた, 世界での勝ち方』, 講談社現代新書, 東京.
- 仲野隆士, 2006, 「ニュースポーツの人口動態」『体育の科学』56(5): 361-365.
- 名寄市 <http://www.city.nayoro.lg.jp/> (閲覧日: 2024年2月11日)
- 大沼義彦, 1998, 「北海道の地域スポーツ」, 須田力編『北方圏住民の生活とスポーツ』, 共同文化社,
札幌, pp133-178.
ー2010, 「小さな町の大きな挑戦」, 石井隆憲, 田里千代=編著『知るスポーツ事始め』, 明
和出版, 東京, pp2-6.
- 大沼義彦, 1996, 「北海道における地域スポーツの検討」, 『北海道大学教育学部紀要』71, : 197-208.
- P. フレイレ, 1979, 小沢有作, 楠原彰, 柿沼秀雄, 伊藤周訳=『被抑圧者の教育学(A.A.L.A 教育・文化
叢書4)』, 亜紀書房(東京).
- 侘美俊輔, 2018, 「地域と生活に根差した高齢者の健康づくり活動の実証的研究: 利尻島と東日本大
震災被災地における聞き取り調査から」北海道大学大学院教育学院博士学位論文,
1-109.
ー2020, 「『カーリング部』設立メンバーにおける4年間の取り組みと地域づくりの可能性～稚
内北星学園大学カーリング部の歩みを事例に～」, 稚内北星学園大学紀要 21:
46-83.
ー2021, 「『主体的, 対話的で深い学び』に向けた教材としての『カーリング』の可能性～『免
許状更新講習』における『カーリング』を活用した授業展開～」, 稚内北星学園大

学紀要 22 : 55-80.

- 2023-A, 「ミニバレーの普及, 拡大の要因分析 ～考案者へのインタビュー調査, 講義録をもとに～」, 『育英館大学紀要』1 : 45-66.
- 2023-B, 「『主体性, 対話的で深い学び』に向けた教材としての『カーリング』への期待～市内教員向けカーリング授業事前研修の試み～」, 『育英館大学紀要』1 : 67-86.
- 2023-C, 「『初心者』を中心としたゼロからの『全日本大学対抗カーリング選手権大会』への挑戦～e スポーツを活用したリアル・スポーツへの接続可能性の検証～」『育英館大学紀要』1 : 87-120.
- 2024, 「冬季スポーツ振興によるまちづくり戦略とカーリング普及・拡大・選手強化への試み～北海道名寄市職員・カーリング関係者へのインタビュー調査から～」, 育英館大学紀要 2 : 印刷中.

東洋経済新報社, 2023, 『都市データパック 2023 年版 (週刊東洋経済臨増 DB シリーズ)』, 東洋経済新報社, 東京.

東原文朗, 2019, 「よそでおこなわれていないスポーツを振興していたら, まちづくりにつながった! 育つべくして育ったカーリング娘」, 松橋崇史, 高岡敦史=編著 『スポーツとまちづくりの教科書』, 青弓社, 東京, pp.118-122.

上野裕暉, 榊井文人, 柳等, 平田洗介, 2014, 「カーリングインフォマティクスにおける試合情報解析のために-ポータブル戦術支援 DB システムの改良-」, 情報処理学会, 『第 76 回全国大会講演論文集』, 2014(1), 627-629.

W.ハナーズ (訳=山中弘, 安藤充, 保呂敦彦), 1999, 「周辺文化のためのシナリオ」, 『文化とグローバル化 -現代社会とアイデンティティ表現』, 玉川大学出版部, 東京 : pp.150-178.

山本雅人, 伊藤毅志, 榊井文人, 松原仁, 2018, 「カーリングと AI」, 『情報処理』59 (6), 500-504.

●謝 辞

本稿は, JSPS 科研費 [JP22K17734](#) 「『通年型施設』の完成を契機とした地方のカーリング普及・拡大・選手強化の実証的研究 (研究代表者: 佐美俊輔)」による助成を受けました. 研究経費の助成に感謝申し上げます. 調査にご協力くださった 6 名の名寄カーリング協会の皆様に御礼申し上げます. また調査の日程調整等を快くご対応いただきました名寄協会事務局のご協力に感謝いたします. 末筆になりますが, 本稿のデータ整理, テープ起こしなどを担当いただいた育英館大学 3 年の伊東真平くん, 西藤稜馬くんのご協力にも感謝いたします.

●英文タイトル

Efforts to the spread, expansion, and athlete strengthening of curling with the completion of a " indoor curling arena : Interviews with people involved in curling in Nayoro City, Hokkaido

●英文要約

In May 2022, the Japanese women's national team won the first ever gold medal at the World

Junior Curling Championships 2022 held in Sweden. In April 2023, the Japanese national pair won the silver medal for the first time ever at the "2023 World Mixed Double Curling Championships" held in Korea. In both competitions, the Japanese representatives were from Nayoro City, Hokkaido, which has a population of less than 30,000.

This paper is an attempt to examine the question, "How did Nayoro City, a farming village in Hokkaido, come to produce world-class curlers? The purpose of this paper is to examine the process of diffusion, expansion, and strengthening of curling players, as well as competitive sport elements such as coaching methods, using Nayoro City, Hokkaido, as a case study. The purpose is to grasp clues for the future diffusion and development of curling.

●英文キーワード

Curling

Coaching Methods

Community Development through Sports

Local Cities

Strengthening athletes

